

## 子ども・教師のジェンダーと社会科はどのように関係している？ —中学生調査の結果・参加者の体験をもとに考えよう



開催日時：2023年2月11日（土・祝）15:00～16:30 実施形態：Zoom

参加者数：22名（運営メンバー含む）

話題提供者：別木萌果さん（東京都立小川高等学校）  
吉田純太郎さん（広島大学大学院・院生）

共 催：全国社会科教育学会

### 趣旨説明

今回は、別木さんと吉田さんが行った中学生アンケート調査の結果をもとに「生徒・教師のジェンダーと社会科がどのように関係しているのか」について、参加者の皆さんと議論を行いました。調査の結果と参加者皆さんのご経験から「別木・吉田調査をどのように受け止めればよいのか」、「なぜそのような調査結果が導かれたのだろうか」等について、建設的な意見交換を行うことができました。

### 話題提供：中学3年生約300人へのアンケート調査の結果

まず、話題提供者の吉田さんからは、アンケート調査の概要と結果についてご説明いただきました。全国の中学校の3年生約300人を対象に行われたアンケート調査を統計学的に分析された結果、2つの問いに対して表のような特徴が明らかとなりました。

表 2つの報告内容

<p><b>問1「女子／男子は社会科嫌い？」</b></p> <p>調査結果：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 数学・理科・技術と社会科は男子の方が好きだが、家庭科、音楽は女子の方が好き</li> <li>② 男子の方が社会科の学習が得意と感じている</li> <li>③ 歴史や公民への興味関心に（統計的に有意な）男女差はない</li> <li>④ 女子の方が身の周りの人たち（家族・友人・先生）に関心がある</li> <li>⑤ 社会科の捉えに（統計的に有意な）男女差はない</li> </ul>
<p><b>問2「女性／男性社会科教師ってどんなイメージ？」</b></p> <p>調査結果：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 社会科教師になりたい気持ちに（統計的に有意な）男女差はない</li> <li>② 女性社会科教師が共感的理解や合意形成に長けていると女子生徒は感じる傾向にある</li> <li>③ 男子生徒は社会科教師の性別を気にしないが、女子生徒は女性社会科教師から授業を受けたいと感じる傾向にある</li> </ul>

## グループ・ディスカッション：ジェンダーと社会科の関係をどのように考えるか？

以上の2つの調査結果を受けて、計2回のグループ・ディスカッションを行いました。両調査結果に対する共感や同意の程度は人それぞれに異なりましたが、「社会科を好きではない、苦手だと感じる女子が多いのはなぜか」（1回目）、「女性社会科教師／男性社会科教師に対してどのようなイメージを持つか」（2回目）という2つの問いに対して、白熱した意見交換が行われました。議論の中で出てきた意見の例として以下4つをご紹介します。

### ●社会科の教育内容にジェンダーの偏りがあるのではないか

まず、社会科教育の内容とジェンダーの関係性に関する意見が多くありました。例えば、ある参加者は、中学校の歴史教材の中で登場する女性の少なさに論及しながら、「北条政子の次はナイチンゲールにまで時代が飛び、津田梅子らに対する言及もコラム程度にとどまる」ということを印象的に述べられていました。そもそも社会科が男性ばかりを取り上げるために、女子生徒が社会科から離れていくのではないかという仮説です。

### ●学校文化が形成する性別役割分業意識が社会科の学びに波及しているのではないか

加えて、教科内容だけではなく、学校文化のなかにジェンダー文化の再生産機能が潜んでいるのではないかと意見も多くありました。教員経験のある参加者からは、社会科授業に対しては女子生徒の方がよりまじめに取り組む者が多かったにも関わらず、生徒会選挙の場においては男子生徒が多く出ている、あるいは多く選出されてしまうことが述べられていました。「生徒会活動は男子が率先して行うべき」という見方が学校内に蔓延・再生産されるようであれば、いくら社会科授業で男女同権を謳っても説得力に欠けてしまいます。日常的な生徒同士のやり取りや職員室における男女間のパワーバランス等が、隠れたカリキュラムとして機能することで、性別役割分業意識が再生産されている可能性が考えられます。

### ●（社会科に限らず）女性教師と男性教師とでは教育への向き合い方が異なるのではないか

一方で、社会科教育に限らず、女性／男性に多くみられる教育への向き合い方における特徴がジェンダーと社会科の関係に影響しているのではないかと意見もえられました。例えば、学習支援に携わるある参加者の方からは、「女性の方が比較的柔和で話をよく聞き、教え方を意識するイメージがあるものの、男性は知識を教えることに重点を置いている」との経験・印象を共有いただきました。ただし、「むしろ女性が一般的に得意としているケアの要素を教育における核とすることが重要であり、これは男性教員も取り組むことが可能である」との意見もあり、単純な女性性／男性性の二元構造を超えた視点も示唆されました。

### ●（社会科に限らず）女性にとってそもそも学校という場は働きづらい環境なのではないか

最後に、社会科教員に女性が少ないという事象を、女性の労働問題としても考えるべきではないかとする意見もありました。多忙化が叫ばれる現代の学校という労働環境において、（社会科教師に限らず）女性の働きやすさ・働き方を再考する必要があるかもしれません。

非常に充実した勉強の機会でした。ご参加いただき、本当にありがとうございました。

※本イベントは、全国社会科教育学会研究推進プロジェクト「社会科学習意識のジェンダーギャップに関する実証的研究－中学生を対象とした量的調査を手がかりに－」の成果によるものです。

（主な運営スタッフ：別木、斉藤、浜田、古野、岡本 報告書担当：岡本）